
悪魔の申し子

貧弱戦士

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪魔の申し子

【Nコード】

N5161Y

【作者名】

貧弱戦士

【あらすじ】

悪魔達が住む世界。そこに一人の半分は人間で半分は悪魔だった男が居た。けど彼はある日ある時間に、殺された。後ろから。彼は死んだ。糸も簡単にだ。彼の夢は人間になりたかった……それを心にしまい、目を閉じた。けど、彼が目を開ければ必死に声を掛けている女の子と出会った

一　く　ま

『ドーーーーーッ！！！！！！！！！！』

何が起こったんだ？

俺は……何で倒れているんだ？

巨大な何かに当たった俺は、微かに眼が開いた

目の前には高笑いしながら、背を向けて去る男が見える……

何で、俺がこんな目に……

悪魔だからか？　悪魔だからって、こんな……意図も簡単に殺されるなんて……

ああ、もう駄目だ……意識が無くなっていく

目をゆっくり閉じていく。体も冷たくなっていく

こんな俺でも、人間になれるかな？　『^{悪魔}転生』という言葉信じ
る悪魔が居るなんて、可笑しいかな？

もうそろそろ、駄目……だ

意識を手放し、そのまま動かなくなった

「——ねえ！！　大丈夫！？　ねえ！！」

誰だ、こんな近くで大声出す奴は

まさか俺を呼んでいるのか？

体が揺さぶられているのがわかる。それを気になり、目をゆっくり開ける

開けた時、目に光が当たる。眩しくて、目の前に居るのが見えなかった

此処は……？ 光を見るなんて、何百年振りだろうか？

頭を抑えて起き上がり、声の主は……

「良かった！！ 本当に良かった！！」

良かった？ その言葉を聞き、体中を見える

まだ痕が残っており、体がだんだん重くなっていく

俺は……死んだんじゃないのか？ 痕は残っているが、少ない……

あんなに食らった筈なのに

「僕、治癒魔法なんて始めて使うから心配したけど……良かった！」

俺を、治してくれたのか？

何だコイツ……悪魔なんか助けるなんて、変わった奴だ

「傷はまだ残っているけど、大丈夫？」

俺にそう聞いてきた

目もだんだんハッキリしてきて、声の主は小さな女の子であった

大丈夫……女の子の目は潤んでいた

俺のために泣いてくれたのか？ 悪魔なんかのために……

俺は目から温かい何かが出た。それは頬へと流れて、地面へと落ちた

それは一滴だけではなく、血が流れるように出てきた

「あ、あんた……名前は」

泣きながらそう聞いた

初めての人間との会話が、それだった

すると女の子は笑顔となって、口を開いた

「僕はネギ！ ネギ・スプリングフィールド。君の名前は？」

手を差し伸ばしてくれた

「……………名前なんか無い。ネギさん、お願いがある」

「ん？ なぁに？」

「…………俺を」

一 〽 丰 〽 (後書き)

感想をください！

二　旅

「ネギさん……ついに卒業だな」

「うん！　僕もやっと一人前かな？」

学校の廊下を歩き、卒業する所に向かう

あの『奇跡の出会い』があつて、数年が経った

俺の名前は『ラグナロク』と呼ばれている。これはネギさんがつけた名前だ

「でもこれからだ。一人前になるには、修行の地で内容をクリアしなくちゃ」

「わかつてるよ！　もう……じゃあ、行つて来るね」

「頑張ってくれ」

大きな扉の前で、ネギさんは微笑んで中へと入っていった

今日はネギさんが卒業する日

ウェールズは祝福しているのか、小鳥達が囀って歌っており、太陽がさらに輝いている

窓から外を眺め、俺はそれを見て口が笑った

「あら？ ラグナ、どうしたの？ 口が笑っているわよ」

「ん？ ネカネか。いや、今日はネギさんの卒業式じゃないか？
早くネギさんと一緒に世界を見てみたいんだよ」

それにあの人をちゃんと守れるから

「ふふ、妹をよろしくね？ ラグナ」

「ああ。そうだ……」

俺はネカネの手を両手で挟んだ

ネカネは赤くなっただが、どうしたんだ？ まあいいや

「アンタも危なくなったら、すぐ俺を呼んでくれ。絶対助けてやるよ」

「／／！！！？ え、ええ」

すると扉は開き、ネカネさんはササツと手をしまった

卒業生達はギヤアギヤア騒ぎ、最後尾にはネギと忌々しい餓鬼が
一緒に居た

「あら、こんな所に悪魔が居るなんて……」

「うるせえ糞チビ。。。女。テメエなんか、ネギさんと比べ物にならねえぜ？」

「む、ムキーー！！！」

猿かよおい

アーニヤをほつとき、ネギさんに近づく

手には卒業証書を貰っており、慢心笑顔であった

か、輝いているぜネギさん

「で、ネギは何て書いてあったの。私はロンドンで占い師よ」

「修行の地は何処だったの？」

「今浮かび上がるころだよ」

すると俺達はネギさんの卒業証書をマジマジ見始める

そしたら英語でだんだんと文字が浮かび上がってきた

何々……

「日本で先生をすること……」

あのジャパンの地でか？

たしかにあそこは文化を大切にしている地であって、魔法にも関係する地だし……

「『ええー！ーっ！！？？』」

するとネギさん達は驚き始め、すぐさま校長の所へと向かっていった

何言ったって、それはさすがに変えられないと思うけど

ほら、ネギさんの目が輝いてらっしゃる

「校長、『先生』とはどーゆーことですか!？」

「いやネカネ、先生は先生だ「黙って!」は、はい……」

教えてあげたのに

「ほう『先生』か……」

さしがに最初は驚くけど、講義するほどでは……

俺も『また』ジャパンに行きたいしねえ

「何かのマチガイではないのですか? 10歳で先生など無理です」

「そうよ。ネギったらただでさえ、チビでボケで「それはお前だろ」
うっ……」

俺は校長とネカネ達の間へと入った

こんな事したら、時間が勿体ないだけだ

「これはもう『運命』だ。ネカネ、アーニヤ。それに……ネギさん、

行ってみたいでしょ？」

ネギさんに聞く

ネカネ達は一斉にネギを見る。その瞳はすでに決まっている

言ってやれ

「うん！ 僕、そこで頑張つて来るよ！！ お姉ちゃん！ アーニヤ！ 校長！」

「ああ……」

「お、お姉ちゃん！」

ネカネが倒れそうになったとき、俺が支えた

たく、本当に妹思いなんだな……たく

「あ、ありがとう／＼／」

「別に……ネギさん。日本に俺の知り合いが居ます。たぶん、校長の知り合いかと……」

「ほう、そこは？」

魔法に満ち溢れる学校

ネギさんにピッタリな学校だ

「麻帆良です。そこなら、ネギさんは立派な魔法使いになるでしょう」

「ラグナがそう言うなら、僕はそこに行くよ！」

「うむ、なら学園長からは言っておく。頑張るんじゃないぞ？　ネギ、そしてラグナよ」

「はい……ネギさん、行きましょう！　ジャパンへ！」

そして、物語は始まった……

二 〽旅〽 (後書き)

感想をください

三　く敵く

「じゃあ、僕は先に行ってるねラグナ」

「ああ。行つてらっしゃい。もしかしたら、俺の方が早いかな」

「ネギ、ハンカチ持った？ それに下着や服も？ 先生になるんだからシャキツとしなさいよ。それにアナタは女の子なんだから、あまり無茶はしないように」

「う、うん……」

ネギさんが旅立つ日

村の出口まで俺達は集まっている

達といつても、俺とネカネとネギさんだけだけど

アーニヤは早くも昨日ロンドンへと、ドナドナの如く旅立ってしまった

まあ、余談だがな

「じゃあ、ネギさん。アツチで会おう」

「わかった。じゃあね！！ お姉ちゃん！」

「ええ。頑張つてね」

ネギは杖にまたがり、空へとだんだん昇って行く

そして一気に加速しだし、そのまま何処かへと行ってしまった

さてと……

「おい、お前は行かなくていいんだよ」

「え……？」

俺は殺気を込めて言い放った

それでも、辺りは静か……無音となっている

こんな朝早いのは当たり前だが、無音過ぎるんだよ

それでも出てこないか……めんどくせえな。シャイなのかよ

俺は全身に殺気を纏い、だんだんソイツに向かって振り向く

『デテコイ』

「！！！？　ら、ラグナ……」

俺は人間の形だが、威嚇というのか他から見たら俺は化け物に見える

すると地面から何かが出てきた

『へっ、よく俺の事がわかったなおい。さすがは同胞だ……爵位か

「？」

「いや、俺はそんなじゃねえ。で、最後の言い訳を聞いてやろう」

全身に魔力を溜め、一步でも動いたら殺すぐらいにな

だいたいテメエ等の狙いはわかってんだよ

『おいおい、ここは俺の目的を普通聞くだろ？』

「そんなぐらいわかる。どうせアレだろ？ あの偉大な魔法使いの娘さんだからな。テメエ等にとっちゃ、厄介だからな」

「じゃあ……ネギを殺すために」

『だいせゝかい。まあ……俺も餓鬼を殺すのはあんまりたくねえが、上からの命令だ。殺らさせてもらうぜ』

姿を現し、完全な悪魔が出てきた

デカイな……けど、見掛け倒しか

『グオオオオオオ！！！！』

大口を開け、そこから巨大な魔法の砲撃を放ってきた

「チッ」

「！？ キャ！」

瞬時にネカネを担ぎ、砲撃が当たるギリギリまで避けた

デカイだけに……そのままだな

「あ、ありがとう／＼／」

「守るって言っただろ？ さあ、此处から反撃だ」

『あん？ 反撃だあ？ 面白い、やってみろ』

ならやらせてもらうか

うーし、一気に終わらせたいから『炎』で行くか……頼むぜ？

「我に従えし七つの悪魔達よ！ 我に力を 炎王！」
ジグ・ラ・マール イービル・トオンテイ
ジグ・ラ・トール アラフレラ

その呪文を唱えると、全身が炎に包まれる

炎は俺の体へと吸い込まれ、あらゆる箇所から炎が出てくる

目も歯も鼻からもだ

「はぁ……何とか噛まずに言えた」

「ラグナ……その姿を見るのは、久しぶりね」

『お、おい！ 何か色々な所から漏れているぞ！！？』

しょうがないだろ？ 『コイツ』を操るには、これが限界何だよ

じゃあ……

「アランガル・テンボー
『炎の球』」

唱えた瞬間に魔力は炎へと変わり、お腹が膨らむ

そして……

「燃え尽きろ！」

一気に口から吐き出す

さっきの巨大な砲撃よりかデカイだろ？

『なっ！？　ぐぐわああああああ……！！！！！！！！！！』

『ドーーーーン！！！！』

そして悪魔に当たり、辺りは大爆発となった

爆発は収まり、もう奴の姿は何処にも無くなっていた

元に戻り、空を見る

「ネカネ、行って来る」

「ええ……行ってらっしゃい」

それを言い、俺は此処から出て行った

ネカネ side

本当に凄い人

彼なら、ネギを守ってくれる……

もう私が瞬きしたら、彼はもう何処にも居なくなっていた

「……………待っているわ。あなた達を」

風が吹き始め、髪を押さえる

そして、空を見上げる

三 〽敵〽 (後書き)

感想をください！

四　く再く

「久しぶりだな……学園長」

「そうじゃの。何年ぶりにお主の顔を見れたわい」

ただいま朝の五時

日が昇りつつある此処、『麻帆良学園』

その学園の学園長室で、俺と近衛　近右衛門という老人が椅子に座って会話している

しかし……

「頭長いなあ。やっぱアンタ悪魔じゃないのか？　それは宇宙人にキャトルミューティレーションされたのか？」

「失礼じゃぞ！？　お主は本当に昔から礼儀というのを……ワシは悪魔じゃなくて妖怪で例えるのじゃ」

そこ？

「で、ネギ君は今日来るんじゃない」

「ああ。ネギさんはたぶんこの学園に大きく関るだろ。それに、さなる成長を。あのサウザンドマスターを超えるでしょう」

「！？　お主がそう言うなら、可能性はあるじゃろ。しかもお主の

『主』じゃからのう」

俺はテーブルに乗っている茶碗を取り、口にお茶を運ぶ

さすがに此処まで来るには体力使ったからな、ついさっき来たばっかだし

「『トントントン』失礼します学園長。高畑と桜咲君達です」

「ん、入っていいぞ」

すると扉からダンディな眼鏡男性と、横に髪を結んでいるの身長が高い女性が二人

.....

「何でお前らが居るんだよ！！！！？？？」

「なっ！？ お前は.....！！」

「！？ ら、ラグナさん」

お前らと言っても、それは女性二人にだ

桜咲の野郎と、マナが何故此処に.....

マナはまあ、今冷静に考えたらわかるけど何でこいつが.....！！！！

「おや、ラグナじゃないか。久しぶりだね」

「ああ、タカミチ。けど今は話しかけないでくれ……」

立ち上がり、両者硬直状態

桜咲の野郎、何戦闘態勢に入ってたんだよ

お前が俺に勝てるわけなくせに……

「よお泣き虫。今頃京で未だに泣いているかと思っただぜ」

「なっ／＼！！！？ 私はまだ昔ではない！ それよりラグナ！
何でお前がまたこの地に！」

「ああん？ 決まってるだろ？ 俺の『主』が今日、此処の先生様
となるからだ！」

悪いかこの野郎！！

だんだんジリジリと距離を詰め、既にオデコがくっ付きそうなく
らいまで

「ラグナさんの『主』か……昔聞いたけど、此処に来るなんて」

「俺が進めたんだ。けど失敗だなあ。桜咲の野郎が居るなんて」

「私は野郎ではない／＼！！！？？」

桜咲の野郎は刀抜き、俺に向ける

それは俺にたいしてのアレだよな？ 買ってやるよ

「こ、こら！ 君達、知り合いなのに何でそんなに仲が悪い」「元からだノです！」「じゃ、じゃあ此処では暴れないで！！ 朝早いから、外でやってくれば……」

「チツ……冷めた。おい桜咲の野郎。今度お前の相手してやるよ。今日はネギさんの大切な日だからな」

「ふ、ふん！ 命拾いしたな」

お互い『魔力』や『気』を抑えて、そのまま無かったような風になった

「……で、ラグナよ。ネギ君は刹那君達のクラス担任になるんじやが……お主はどうするのじや」

「あ！？ んなの決まってるだろ！！！ ネギさんのために、俺はネギさんの傍に居なくちゃなんのだ！！ だから………どうしたらいい？」

『ズゴ！！』

俺以外の人物が一斉に転ぶ

だって、俺学校何て全然わかんないし。どうしたらいいかわかんないんだけど

「……そうだ！ 学園長、彼を生徒にしたらどうですか？」

「ホッ？ それはどういう意味じゃ？」

「私達は女子中ですよ？ 男子中にラグナさんを入れるんですか？」

「嫌だ！！ 絶対嫌だ！！！！ ネギさんと一緒にいい！！！！」

それだけは譲らねえよ！！

タカミチは溜息を吐き、学園長と向き合った

「彼を男子、女子の共学するために様子見という口実はどうでしょうか？ 実際そんなのは無いですが、これなら話の辻合いは通ります」

「それは良い考えじゃ。ラグナよ、それでいいかの？」

「ああ。それなら俺は賛成だ」

「じゃあ決定じゃ。刹那君に龍宮君、ネギ君や彼を頼んだぞ」

「「はい」」

そして学園長室での話し合いを終わり……

「よおエヴァ、元気だったか？ それにお茶々も」

「ふん、お前も元気そうだな。悪魔」

「久しぶりです、ラグナさん」

屋上で仁王立ちしている少女と横に居る女性？

ゆっくりと近づく

「お前、また此処に来たのか？ まあ、お前が来ない数年間は暇だったかな」

「ラグナさんはどうして此処に」

「ふん、俺の『主』が此処の先生となるんでな。その付き添いだ」

エヴァもゆっくりと俺に向かって歩いてくる

「そうか。お前の『主』とい奴が、此処の先生となるのか……実は、此間爺に聞いたのだが、お前の『主』とは、『あいつ』の娘か」

「ああ、たぶんお前の思っている人物の娘だ」

「そうか……なら、いい血が「おい、それ以上言ってみろ。それに手を出してみる。殺すぞ」つ……！ 前よりか早くなっただな」

奴の首に爪を当てる

お茶々も気づかず、ずっと俺を見ている

「……いや、すまん。感情に任せすぎた。じゃあな、エヴァ」

「ああ……」

「さようなら、ラグナさん」

手を振り、屋上から去った

さてと、そろそろネギさんが来る時間かな

四　く再び（後書き）

感想ください！

設定資料

氏名

ラグナロク

RAGNAR?K

生年月日：不明

血液型：B型

好きな物：ネギ・葱・バッドボーイ的な物

嫌いな物：ネギに関する悪いこと・悪魔

所属：ネギ・スプリングフィールドの使い魔・麻帆良共学シュミレ
ーション生徒

得意技：変身魔法

何千年も生きている悪魔。だが外見は中学生並で、悪がき見たいな
風貌

黒髪でアホ毛が一本生えている

『奇跡の出会い』、ネギとラグナが最初に会った日でそれ以来ネギ
を慕っている

ネギの近くに居たいために、男女共学という口実を作ってネギが担
任するクラスへ

『魔法』はエヴァと同等で、麻帆良で一度やりあったがそれ以降本
人は『二度とやらない』と言っている

真名や刹那等、結構な人脈が居る
人間と魔族とのハーフだが、『人間に近い悪魔』だと思っている。
真名とかは『悪魔に近い人間』だと

変身魔法

「ジグ・ラ・マール 我に従えし七つの悪魔達よ！ ジグ・ラ・トール 我に力を
〇〇〇」

体の中に七つの悪魔達の魂が宿っている
〇〇の中に、七つの悪魔達の名前を入れて力を一時借りる

現在わかっている悪魔

『アラフセラ
炎王』

炎の悪魔で、体中から炎が漏れ出すほどに

技
『アランガル・テンボー
炎の球』

腹部に魔力を溜めて、炎に変える。一気に口から吐き出し、当たったら大爆発する

随時更新……

設定資料（後書き）

感想ください

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5161y/>

悪魔の申し子

2011年11月18日05時11分発行